

対 談

アメリカ同時多発テロに遭遇して — 私達が学んだ「ホスピス・マインド」 —

対談： 館 有紀（地域医療振興協会 石岡第一病院内科）
高橋 昭彦（地域医療振興協会理事 介護老人保健施設琵琶）



館 有紀先生

私達は今回、アメリカ合衆国東海岸のホスピスや関連施設を視察するツアーに参加しました。参加者は医療、教育、報道関係者、合わせて28名で、2001年9月4日に成田空港を出発しました。

予定ではワシントンとニューヨークの12箇所の施設等を訪れ、9月14日に帰国するはずでした。ところが、ツアーの日程も終盤にさしかかった9月11日、私達はニューヨークで奇しくも同時多発テロに巻き込まれてしまったのです。しかしその体験は、本当の意味でのホスピス・マインドというものを深く感じ取る機会となりました。

この対談は、まだ空港閉鎖の状態が続いている9月13日と帰国前の9月16日に、ニューヨークのグランド・ハイアット・ホテルで行われたものです。シスター・ビンセントの笑顔、テロ事件当日の生々しい様子、死を覚悟した緊急避難命令、日本人の危機管理、街の悲しみ…これらの体験を通じて私達が学んだ「ホスピス・マインド」をお伝えできれば幸いです。
(高橋昭彦)

【シスター・ビンセントの笑顔に 魅了され】

高橋：館先生はなぜ今回のこのホスピス視察に参加されたのですか？

館：そうですね、私はこの数年、「ホスピス・マインド」の意味を医療現場の中でずっと考えてきました。結局ホスピス・マインドとは、出会う方々に深い関心を寄せ、その方の苦しみや悲しみに耳を傾けたい、心や身体の痛みをとって差し上げたいと思う心だと気付くに到りました。そしてすべての医療者の心の中に、そのような温かい気持ちがあることも見えてきました。その意味で、私はこのマインドは、ホスピスだけではなく一般的な医療にも必要であり、またそれを超えて日常の中にも生きているのではないかと…。それをもっと日本の医療現場に、また、一般の方々にもお伝えできれば、心優しき医療の展開、更には心優しき世界の展開につながっていくのではないかと、思ったのです。それが参加を決めた理由です。

高橋：なるほど。私がこのツアーに参加したのは、在宅医療に関わる中で必要だと感じてきた視点がきっかけです。家で暮らしたい人の希望をどう尊重し、家族をどう支えていくのかを模索していくうちに、「必要なものを必要な時に必要なだけ」、「自分が受けたいケアをする」「どんな障害を持っていても、その人らしく生きその人らしく死ぬ権利がある」ということを学んできました。ところが、ホスピスについて知るにつれ、自分が学んできた視点の多くが、ホスピスの根底に流れる考え方＝ホスピス・マインドに一致しているのではないかと感じたのです。そこで私は、今回のツアー

に参加して「在宅が基本」と言われているアメリカのホスピスを体験することによって、ホスピス・マインドを自分の中で確かめたいという思いがありました。

館：私達はいくつものホスピスを訪れました。ワシントンのホスピスの中で、圧倒されたところがありましたね。

高橋：ありました。私達はまずワシントンを訪れて、いくつかのホスピスを視察しました。その中で一番印象が強かったのが、ワシントン滞在の最終日、9月8日に訪れたエイズ・ホスピス・イン・ワシントン「ギフト・オブ・ピース (Gift of Peace)」でした。

館：そこに行って、ホスピス・マインドの真髄を一瞬にして掴んだような気がしました。このホスピスは皆様に御紹介したいですね。ここは1986年にマザー・テレサにより創られたところで、エイズの患者さんだけでなく、高齢者や肉体的・精神的に苦痛を負う人々のためのケアが提供されている場所です。

高橋：「ギフト・オブ・ピース」は、ワシントンの郊外、広大な緑の芝生に囲まれた、とても景観の素晴らしい場所にありました。施設自体は、決して新しくはないし立派ではないのですが、何とも言えない趣がありました。そこで出迎えて下さったのが、シスター・ビンセントでしたね。彼女はギフト・オブ・ピースの責任者で、マザー・テレサと同じサリーを着ておられました。素晴らしい笑顔と凛としたお姿が印象的でした。

館：本当に天使のような方でしたね。

高橋：私達は最初、ある部屋に案内され、こちらからの質問にシスターが答える形でしばらく質疑応答が続きました。他の訪問先でもそうであったように、メンバーからは、スタッフの陣容とか、入っておられる方の疾患だとか、経営内容についての質問が続きました。驚いたのは、このホスピスは全く非営利でやっておられて、もともと生活保護など貧しい方を受け入れていることから、利用者の負担はなく、政府からの助成金もなく、収入がゼロということでした。すべてを寄付に頼っているのですが、一度も寄付を欲しいと対外的に言ったことはない。にも関わらず、多くの寄付が

集まり、数多くのボランティアが関わっているのです。中には、エイズ患者の使ったリネ類の消毒をある病院が無償で行っているとか、もう5年もここに住み込んでボランティアをしている方もおられるとか、他にも例えば、窓が壊れたことが分かったりすると、いつの間にか不思議に窓を直してくれる方が現われるという…。シスター・ビンセントによると、「必要な時に必要なことをして下さる方」が現われるのだそうです。

館：そうおっしゃっていましたね。

高橋：シスター・ビンセントを始めとする、そこにおられる方が目的をひとつにし、高いミッションとマインドを持って働いている。ただそれだけなのです。それが周囲からの寄付を呼んだり、人を集めたり…。これには頭をガーンと殴られたような感じですね。私達は今まで何を学んできたのだろうか。

館：施設が創られた当初は、入所する方がエイズ、ということで、地域住民から理解も得られず、関係は難しかったようですけれども、今は全然違うと…。そのホスピス施設の周囲は、殺人があったり強盗があったりと、決して治安のいい地域ではなかったようですが、今は住民との関係は良く、逆に何か私達にあった時には守って下さる、とおっしゃっていました。最初は営利目的かと疑っていた方も、今はこちらのことを理解して下さっているということでしたね。

高橋：やっぱり、私達がやろうとしているのは何のためか、というそのマインドですね。目の前に困っている人がおられるのなら支えたい、という高い気持ちがあれば、環境は自ずと整っていくのではないかと思います。

館：それが法則でしょうし、医療だけではなく、すべての原点なんではないでしょうか。

高橋：そう思います。

【ホスピスとは、理念である】

高橋：私は最初にシスター・ビンセントにお会いした時に、電撃のようなものが走りました。なんてこの方の笑顔は素晴らしいのだろう、と。

館：私も彼女の、何といいましょうか、後光が出

対談

ているような静かな姿に、圧倒されました。「この方は、なんてすごいんだろう！」という感じです。彼女の姿そのものが、もう、ホスピス・マインドとは何ぞや、という問いの答であるように思いました。

高橋：どうもそれは館先生と私だけが感じていたことではなかったようでした。そこで面白いことがおこったのです。

館：彼女の姿に、そこにいた28人のメンバーのマインドが、がらっと変わってしまったのです。

高橋：変わりましたね、確かに。

館：今回のツアーでは、おそらくホスピスといういわゆる「箱モノ」の実情を中心に学びに来た方が少なくなかったと思うのですが、彼女の真摯な生き方や、人格に感化され、ホスピスというのは施設ではなく理念なのだ、ということを理解し、質問内容が、ホスピスのシステムや運営面に関することから、彼女個人に対する質問に変わってしまいました。「なぜ、この道に入ったのか」という質問が、ジャーナリストからありました。今までの施設ではあり得なかったことが起こりましたね。

高橋：今まではなかったですね。

館：また、ある医師から、「私たち（ホスピス医）の心の中にある理想が現実に日本に展開されるために、何が必要か」という質問がありました。シスター・ビンセントはこのように答えました。「自分の使命に忠実に、誠実に生きることです。この姿勢を貫けば、多くの方々の助けも得られ、志を同じくする仲間も現われ、必ず実現していくのです」と。

高橋：そうでしたね。彼女はカナダ出身で、看護婦になることがこの道に入る第一歩だったそうです。看護婦をしていて、自分の目の前に起こったことに対して、やはり深く関わりたい、という思いを常々持っておられた。そして彼女はある時、天の声を聞いたのです。これは、「内なる声」だったのかも知れませんが、目の前で苦しんでおられる方のために尽くしたい、という純粋な気持ちでこの道に入られたと言っていましたね。

館：でも最初は、その「内なる声」に気づかないふりをしていた…。

高橋：自分はちゃんと仕事をして、恋もしたいし、結婚もして子供も持ちたい、青春を楽しみたい、と思っていた。

館：でも彼女は、その内なる声に逆らうことができなかつたのです。神のためにすべてを捧げる、という切迫した気持ち、コーリング（天啓）があったとおっしゃいました。そして今は、その声に応えることができていると本当に幸福だと…。

高橋：そう言って、微笑んでおられましたね。

館：私自身は彼女の心の変遷を聞いた時に、彼女の言う「内なる声」に近いものは、すべての方が持っているのではないだろうか、と思ったのです。すべての人がすでに持っているものを、彼女は、ただ素直に体现しているだけ…。日々、病んでいる方々と関わっている医療者であるならば、この感覚というのは分かるように思います。目の前の患者さんを苦しみから救って差し上げたいと思う心に忠実になって、できることをしていった時に感じる、あの暖かな感覚…。

高橋：ふむ。

館：医療者がすべて、自分の中にある素晴らしいマインドを素直に体现していけたら、世の中の医療はよりよい方向に変わっていくんだな、と思いました。

高橋：本当にそうですね。

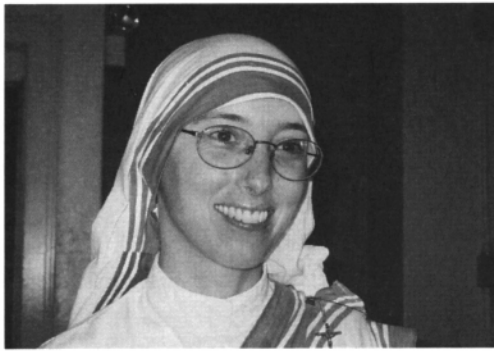
【医学生にシスター・ビンセントの 写真を見せてあげたい】

館：高橋先生は、シスター・ビンセントに一目惚れしたみたいですね。

高橋：また何という質問を(笑)。何と言えはいいのでしょうか。私は、ギフト・オブ・ピースを出る前に、シスターにお願いをしました。最初、彼女は自分の写真を撮らないでくれとおっしゃっていました。でも私はどうしても彼女の写真を撮りたかつたのです。どうしてかと言いますと、「ホスピスというのはシステムではない、最終的にはマインドなんだよ」ということを教えて下さるのは、彼女の「笑顔」だと思ったからです。

館：それで写真を撮る許可を頂けたのですね。

高橋：そうです。私は彼女の目を見つめて真剣に



笑顔のシスター・ビンセント。(マザー・テレサ創立のエイズホスピス・イン・ワシントンにて)

お願いしました。「あなたの写真を是非、日本の医学生たちに見せてあげたい。あなたの笑顔をお伝えしたい」と。そして、写真を撮る許可を頂きました。

館：それが、この写真ですね。

高橋：そうです。

【ニューヨーク同時多発テロに遭遇して】

館：私達はギフト・オブ・ピースの視察を終え、9月8日にデルタ航空の旅客機で、ワシントンからニューヨークに飛びました。ここでも予定通り視察をしていたのですが、とんでもないことが起こってしまいました。

高橋：そう、あれは、9月11日のことでした。朝9時前にホテルを出てバスに乗り、ダウントウンと言われるマンハッタンの南側にあるセント・ビンセント病院のホスピスを見学に行く予定でした。そこに向かっていくと、何やら周囲が慌ただしいんですね。道路を歩く人々が立ち止まり、同じ方向を向いている。

館：私はバスの左側に座っていたのですが、ふと気がつくと、立ち並ぶ高層ビルの垣間から、巨大な入道雲が出ているのに気づきました。最初は雨でも降るのかな、と。

高橋：何台もの救急車や消防車がサイレ

ンを鳴らしながら、私達のバスを追い抜いて走っていきました。前方を見ますと、超高層ビルが燃えていたのです。

館：入道雲だと思っていたのは、そのビル、ワールド・トレード・センターから出ている煙だったのです。

高橋：現地ではツイン・タワーという愛称で親しまれていて、ニューヨークの絵葉書にも登場するアメリカ資本主義の象徴のような有名なタワーですけど、そこから煙が出ていることに気づきました。

館：最初は皆、普通の火事だと思ったのです。

高橋：でもあのビルであれほどの規模の火事があるというのは、後で考えるとちょっと考えられないことでした。

館：「何が起こったんだろう」と言い合っているうちに、バスは、セント・ビンセント病院に到着しました。実は研修する予定であったこの病院は、



道ゆく人の視線が集まる。(バスの中から)



セント・ビンセント病院前から見た燃え上がるワールド・トレード・センター

対 談



私達が研修を予定していたセント・ビンセント・病院は、ニューヨーク有数の救急病院。すでに9時30分には救急スタッフはスタンバイしていた。

ワールド・トレード・センターから一番近い救急指定病院だったのです。バスが目的地に到着したときには、すでに道路には人の波であふれていました。その頃には、南側のビルからも煙が上がっていました。

高橋：病院の前には、緑色の予防着を着た大勢のドクターやナースたちが、ストレッチャーを何台も用意して待機していましたね。非常に迅速な対応だったと思います。

館：これはとんでもないことが起こっていると思いました。その時になってようやく、周りの人から多発テロがあったとの情報を得ました。

高橋：私達は病院の入り口へと移動する際、救急の前を横切ろうとしたら、さすがに怒られましたね。

館：ええ。当然視察は中止になり、病院のロビーにいた私達もここから出て行ってくれ、と言われました。

【ホスピス・マインドは日常の中に】

高橋：バスに帰りの連絡をとる間、出口のところで待つようにと言われて30人近くの日本人が道路で待っていたのですが、その通りは多くの人達が通る場所でした。そして私達は彼らからすれば、単なる「観光客」だったのです。

館：こんな時、日本人の団体は、とっさに何をしたらいいのか分からないのです。病院の入り口の前に立ち往生し、日本人が固まって、通行の邪魔

をしているようなそんな状態でした。ある女性が、「sight seeing (観光客)！」と泣きながら怒っていました。多分、ビルに勤める方の家族だったと思います。それに気づいて私達は邪魔にならない場所に移りました。

高橋：この時ほど英語が堪能だったらと思わずにはいられませんでした。その彼女の怒りと悲しみの雰囲気だけは分かりました。私達の団体の中には、幾人か英語の堪能な方がおられて、このような雰囲気の中であっても、彼らなら今何が起こっていて私達がなぜ非難されている

のか確実に理解できたと思うのですが、全員の方にはそれが分からなかった。結果的に、病院に運ばれてくるかもしれない方を持つ家族や、点滴や消毒液を運び込んだりして慌ただしく働いている方々に、迷惑をかけてしまいました。

館：そうでしたね。

高橋：私、その時思いました。アメリカという国は、多くの民族が住む国です。例えば東洋系のアメリカ人もいるわけですから、私達も英語を理解していると誤解されても仕方がないのです。私達があたかも英語を理解して、現状を踏まえた上で通行の邪魔をしている、と思われても仕方がないのです。私はその現場で、今私達がどんな状況にいるのか、一番分かっていなかったのではないかと反省しています。

館：非常に失礼なことしてしまいました。泣き叫びながら病院を出たり入ったりする方もいらっしゃいましたね。周囲の方々に気を配るのも、私はホスピス・マインドだろうと思います。

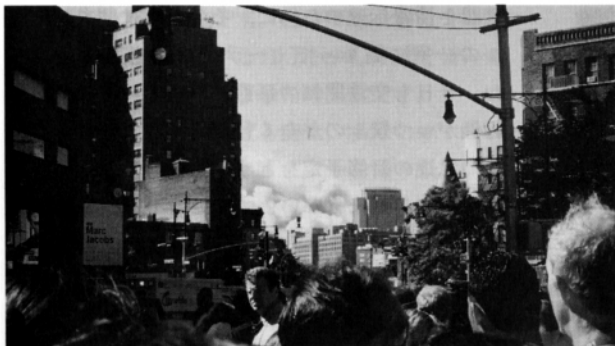
高橋：本当に…。

【暴動に巻き込まれて】

高橋：バスと連絡を取っている間に、私達の目の前で、ビルが崩れ落ちましたね。さっきまで煙を上げて燃えていたビルが、忽然と消えていました。

館：ええ、まるで映画のワンシーンのような、現実味のない光景でした。

高橋：もうそこは封鎖地区になっていましたの



人々の悲鳴と共にワールド・トレード・センターのツインタワーは崩れてしまった。

で、バスは入れないことがわかりました。ここは危険ですから、私達はホテルに帰ろうとしましたが、交通機関はマヒ状態。地下鉄は何かが起こると逃げ場がなくて危ないし、タクシーも渋滞で動かず、私達は騒然としたマンハッタンを、徒歩で約2時間かけ、ホテルに向かいました。

館：道路は渋滞、パトカーや救急車のサイレンが鳴り響き、携帯電話が不通となったみたいで、公衆電話を待つ人が列をなしていました。街頭の店も臨時閉店になっていて、いろんな人種の人間が相互に入り乱れる混沌とした状態でしたね。あの朝すれ違った消防車やパトカーの中に、事件に巻き込まれて亡くなられた方も大勢いらっしゃったことと思います。多くの消防士さんは、ビルが崩れるというその時も、非常階段をへとへとになりながら、必死で駆け上がっていたとお聞きしています。このような形の死は、気持ちが分かるだけに本当に悲しく、辛いです。

高橋：本当ですね…。そのような状態の街中を、私達は徒歩で帰ってきました。ホテルが見えてきた時に、私達は最初の暴動に巻き込まれそうになりました。命の危険を感じましたね。館先生はどこにおられました？

館：同じく、ホテルの近くの交差点です。

高橋：私もグランド・ハイアット・ホテルの手前の交差点にいました。もうすぐ着く、と思い、油断していた時でした。

館：アメリカではテロがあると、次のテロもあると考えます。まだハイジャックされた飛行機が他にもあると言われていた時でした。次のテロの標

的として、多くの人が集まる摩天楼の走りであるエンパイア・ステート・ビルや、歴史的建造物であるグランド・セントラル・ステーションは、テロリストにとって格好の獲物だったのです。実は、宿泊先のホテルはグランド・セントラル・ステーションに隣接していたのですが、私達がホテルの手前にさしかかったその時、駅の構内から、大勢の人々が、「わーっ、爆弾だー」と叫びながら集団になってこちらになだれ込むという…。怖かったですね。

高橋：本当に怖かった。戦慄が走りましたね。皆、建物の壁際に避難しました。

館：何が怖いかって、一体、何が起こったのか理解できないうちに、大勢の人がなだれ込んで来る、という。皆、身体大きいですし。

高橋：あのような時は、車椅子の方や、お年寄りも危険だったと思いますよ。

館：実際、車椅子の方がいらっしゃいました。壁に寄ることもできずに、道路の真中で諦めてじっとしているその表情を見た時に、何とも言えない感情を抱きました。そこだけ時間が止まっているような感じでした。私は情けないことに、その方の存在に気づいたのにも関わらず、自分の身の安全を守ることにしかできなかった。彼に手を差し伸べることができなかった。と言うより、助けようとも思わなかった。これは大きな後悔として残っています。あの場面は多分、忘れられないと思います。

高橋：そうでしたか…。

館：また、このようにも思いました。あの時私は、プライベートの顔をしていたんだな、と。日常の中で、医師としての顔とプライベートの顔を完全に分けた生活をしていたことが、こんな場面が出てくるんだな、と。結局、ホスピス・マインドを、医療現場という視野の中だけでしか考えてなかったんだ、と痛感しました。もしそのマインドが根付いていれば、どんな状況下であっても、私は自分の内なる声に素直に従っていたら、と。これは今後の自分の課題ですね。

高橋：なるほど。その「気づき」が大切ですね。

対 談

結局、すぐにその暴動はおさまりましたし、何も爆発はしませんでした、危なかったですね。

館：そのようにして、つい2日前に訪れたウォール街や、数多くの人々にぎわうマンハッタン中心部が、数時間のうちに激変してしまったんです。その変化の様子を、私達は確かに見ました。

高橋：確かに。

館：私達は緊迫した状態でホテルに到着し、指示があるまで待機となりました。そのホテルの窓から見える街並みは次第に人通りも途絶え、ゴーストタウンのようになりました。

高橋：その後、いろんな情報が入ってきました。テロリストは、何の罪もない一般の乗客が乗った旅客機をハイジャックして、しかも燃料をたくさん積んでそんな便を選んで、そればかりかナイフで乗員や乗客を刺していったそうじゃないですか。何ということをも…。

館：その時の乗員や乗客の方々の気持ちを考えると、本当に胸が痛くなります。

高橋：本当に…。一瞬じゃないわけでしょ。恐怖の時間がある。死ぬかもしれない、もうダメかもしれない、自分達がビルに突っ込んでいくということが分かるわけですから…。

館：驚愕、ですね。

高橋：本当に辛かったし悲しかっただろうと思います。家族も、愛する人も、たくさんいたろうと思います。

館：本当に…。

【死を覚悟した時】

高橋：さて、今日は9月13日ですが、先ほどは死ぬかと思いました。

館：ええ、私も今回はもうダメかもしれないと思いました。

高橋：助かってよかった。

館：本当に。お互いに命があって、本当によかったですね。何があったのか、高橋先生、お願いします。

高橋：はい。私達は、事件の後、緊迫した時間を過ごしていました。私達メンバーにあてがわれたホテルの部屋は各階ばらばらでしたので、無事の

確認と情報伝達のために、それからは朝夕、ホテルの一室に集まってミーティングをしていました。今日も空港閉鎖の事態が続いていまして、飛行機がいつ飛ぶのか全く目処が立たないこと、今後の私達の研修予定をどうするのか、マンハッタンを脱出したほうがいいのではないかなど、などの意見交換をしていました。明日、14日は、国民的な祈りの日ということでした。それでミーティングが終わろうとする時、神父様でもあるアルフォンス・デーケン先生の声かけで、私達も黙禱しよう…と…。それで皆で祈っていたのです。その時に、最初の館内緊急放送がありました。「ホテルから出ないように！」という指示でした。

館：皆の顔に緊張が走りましたね。

高橋：続いてすぐに2回目の館内放送がありました。「今すぐホテルから出なさい、全員避難しなさい！」って、慌てたような声で。全ては聞き取れなかったのですが、「evacuate (避難する)」という単語ははっきりとわかりました。「来たか！」という感じでした。

館：あの声には、本当に緊迫感がありました。ちょうど私達は、ホテルの28階にいたのです。その部屋から廊下に出、薄暗い非常階段をつたって、とにかく降りました。

高橋：そうそう。

館：本当に怖かったですね。ワールド・トレード・センターの事件でも、非常階段を必死で降り、ビルが崩れる前に何とか助かった方々の体験を聞いているだけに、階段を降りている時は、もうダメかもしれない、と思いました。

高橋：私も死を覚悟しました。爆弾なのかまた飛行機がくるのか分からないが、今爆発したら、「死ぬかもしれないな」と思いました。28階から降りるわけですからね、今更焦ってもしようがないと思いました。皆で、黙々と階段を降りました。その足音だけが耳に残っています。

館：私の前には膝の悪い方がいらっしやいましたが、誰も追い越していく方はいませんでしたし、怒る人もいませんでした。そのことであえて、心が落ち着きました。ああ、これはまた心の方向性を試されているな、と。また、もうダメかと思いつつも、ある一方では冷静になっていく自分…。

これは初めての感覚です。逃げている自分やいろいろなことを考えている自分を少し距離を置いて見ているような、そんな独特の感覚です。

高橋：また、私達が逃げる時に、多くのホテルの従業員が「ここが非常口、ここから降りなさい」って誘導して下さったのです。

館：そう、自分達も命の危険があるのに、ゲストを先に逃がす、というあの姿勢に感動しました。

高橋：それでようやく下に着いて、その途端に警察官が「2ブロック先まで退去しなさい」って。

館：外は、避難号令のかかった群衆でごったがえしていたので、また危険を感じました。でも、高橋先生が同じ場所にいるから何となく安心というか、先生がいるなら、生きて日本に帰れるな、という妙な確信がありました。

高橋：またまた(笑)。でも何か、ここまできると、腹をくりますよね。

館：何が起ころうと、まあ仕方がないかな、という諦念みたいなものが出てきます。

高橋：こういう時は、身一つで逃げるのが一番です。パスポートより命が大事。

館：そうですね。幸い、その避難命令は誤報だったようで、2時間後に避難は解除され、私達はホテルに帰ってきました。

高橋：避難している時、いろいろなことがありましたね。

館：ええ。外に避難した時、日本人旅行者の女性の方4人がおられました。その中のお1人が、怖かったのか泣いていて。私達は団体ですからそれだけでも安心ですが、彼女達のような個人旅行者は本当に心細い状態だったようで…。「私達と一緒に避難しましょうよ」と。

高橋：その時は、お名前を伺っている話をして、一緒に避難をしただけでしたが、彼女達には本当に喜んでいただけましたね。

館：ええ。後からホテルの部屋に、「本当に嬉しかったです。ありがとうございます」という手紙がありました。

高橋：こういう時に助け合い、ですね。もっと広げて言うと、日本人であってもなくても、困っている方がいれば、お声をかけて差し上げたい、という。

館：語学が堪能であれば。

高橋：そう(笑)。そこが疑問なのですが。

館：結局、ホスピス・マインドというのは、医療の現場だけの話ではないんです。

高橋：そう思いましたね。

【気力を出し続けるためには】

館：あれだけの人数の命が失われた無差別テロには、いいようのない憤りを感じますね。

高橋：本当に…。

館：いつ日本に帰れるのか分からないという不安の中で、気力を出し続けるのに不可欠なことって、何でしょうか。現にグループの中でも、精神的なストレスで、だいぶお疲れになってきている方も出てきていますし。いつまた避難命令がかかるか分からないですから、服を着て眠り、ベッドの足元には靴を置き、最低限の荷物と懐中電灯を枕元に置いているような毎日ですからね。

高橋：やはり、相手のこととか、周りの方々のことを考えられる心、その一点だろうと思います。

館：そうですね。こんな状況であっても自分のことだけではなく、他の人々の気持ちを推し量り、気遣う心なのでしょうね。あとは、他の人々を信じ、励ましあう心、そして未来を信ずる心…。報道を見ていると、暗い報道が続いているじゃないですか。私、こう思っているのです。もしかすると事件そのものより、暗い報道によって世界に混乱が生じ、人々の心が乱れたり、恐怖にとらわれることの方が害は大きいかもしれない、と。ですから逆接的ですけども、今、一番重要なことは、これを乗り越えた先の未来を信じることじゃないかな、と。

高橋：本当にそうですね。

館：そう。また暴動に巻き込まれるかもしれない、という、何とも言えないストレスがありますが、そんなメンタリティーがあれば、あまり取り越し苦勞をしないでいられる。皆、気を張っているから元気そうに見えますが、かなりの心労があるでしょうし。

高橋：ものすごいストレスでしょうね。

館：気持ちを落ち着けるために、私自身は一人に

対 談

なって自分をふり返る時間が必要なのですが、先生は私と行動パターンが逆ですね。先生は表にどんどん出て、いろんな方と積極的に関わって、丁寧な気配りをされている…。私は今回、高橋先生の同行者に対する気遣いを見ていて、本当に勉強になっています。自分にないものを持っているなあ、と。私も先生のようになりたくて素直に思いました。

高橋：ありがとうございます。ホスピス・マインドをシスター・ビンセントからいただいたからでしょう（笑）。

館：他者のことに気を配れる精神性、ですね。それが内面の強さになっているんでしょうね。結局、未来を信ずる心があれば、やることは一つなんです。今という時間の中に、未来への布石があるのですから、今、できることをしていくしかない、と。このようなメンタリティーを持つ必要があるように思います。

【日本人の危機管理能力のなさ】

高橋：やはりこういう時に必要なのは、冷静な考え方と、「笑顔」ですね。

館：そうですね。あと私が今回、本当に強く思ったのは、私達日本人の危機管理能力のなさでした。私達は最初何が起こったのか分からなくて、バスで現場に向かって走っていましたが、セント・ビンセント病院から徒歩でホテルに帰る時も、危険だと思われる地下鉄を選択しようとしていました。幸い、同行した看護婦さんの中に、以前ニューヨークの病院に勤務されていた方がいて、彼女の指示と土地勘があったために、危険な選択をせずに済みました。

高橋：そうですね、彼女の存在は、心強かったですね。結局、戦後の私達は、身近に戦乱やテロを経験したことはほとんどありません。これまで起こった数々の戦乱やテロ事件についても、テレビや新聞というメディアから情報を得ていますので、どこか遠い世界で起こったことのように思ってしまう。

館：そう。今回は歩いて行けるほどの場所で起こっているにも関わらず。

高橋：ホテルでテレビを見ていると、自分達は今、まさにそこにいる、ということがリアリティーを持って感じられないのです。しかし今、実際は非常に危険なところにいる。

館：自分の置かれている状況をなかなか認識できないんですよね。もしかするとあまりにも強い不安があるから、逃避して気付かないふりをしているのでしょうか。それとも、認識しようと思ってもなかなかできないのでしょうか。

高橋：どちらもありえると思います。でも実際は、平和に慣れすぎた私達がいると思います。現に、メンバーの中で鋭い方々もいて、あるいはこれが世界の常識かもしれませんが、マンハッタン島からいかに早く脱出するかを提案していた方や、身一つで脱出する際、捨ててもいい覚悟でスーツケース以外に、別に小さな荷物をまとめている方や、水と食料を調達するチーム、メンタルケアを行うチームの編成などを考えていた方もありました。

館：阪神大震災を体験なさった方は、さすがに危機管理のノウハウを体得されていました。確かに、報道から流れる情報に巻き込まれて必要以上に恐がったり焦ってはいけませんが、淡々と現状を見つめつつ、今、世界が大きく変わろうとしているその端境期に自分があることを認識して、具体的に何ができるかを考える姿勢が必要だろうと思います。

【マクロな視点で物事を見ていく能力】

館：私たちはこの状況の中で、ある一つの決断をするために、長い時間、ディスカッションし続けましたね。今、アメリカ全体が喪に服している時期だから、病院側の許可があっても、遠慮して視察を中断すべきではないか、という意見と、許可があるのなら視察を続けたい、という意見の二つに…。

高橋：視察を続けたい方々の理由は、機会があるのならできる限り学び尽くして、日本に還元したい、ということでした。アメリカは本音でものを言う社会だから、来て欲しくない時はそう言われるだろう。だから受け入れ側がどうぞと言えば、決して失礼にはあたらなないし、いいのではないか



事件後、街のいたる所で半旗がかげられてた。
(メトロポリタン美術館)

と。一理ありますね。

館：逆に視察を中断したい方の言い分は、30名近くの日本人が、今この時期にこの危険な場所から団体でバスに乗って視察に向かう、ということが一体どういうことなのか考えてみて欲しい、と。

私は中断したい側だったのですが、その理由は、数多くの行方不明者のご家族が、あちこちの病院を探し回ったり、電柱や掲示板に「尋ね人 (missing)」の紙を貼り出すため、この辺りを悲しみに暮れながら歩き続けているだろうと思ったからです。ホテルのロビーにも疲れ果てて座っていらっしやるかもしれない。それを考えると、とても今は、視察に行こうという気持ちにならないんです。

高橋：私も中断したい側でした。家族や婚約者が瓦礫の下にいるかもしれない。携帯で、助けを求めているかもしれない。その場所は、この近くなのです。街中が悲しさと怒りに震えている時に、私も心情的に視察、という気持ちにはなれないです。実際、今、いたるところで星条旗の半旗が見られます。

館：そうですね。

高橋：私達が学びに来たのは、実はホスピス・マインドなのです。今、まさに、このホスピス・マインドとはいかなるものなのかを試されているように思いました。今回、はっきり分かったのは、私達の目的は建物としてのホスピスを見に行くことでも、システムとしてのホスピスを見に行くことでもなかった。ホスピス・マインドをいかに自らが実践し、日本に持って帰るか、という、そのために来たと思っているのです。

館：そうですね。

高橋：そのホスピス・マインドを、私達は十分に感じ取ることができました。シスター・ビンセントにもお会いしました。

館：そのマインドで再度考えてみるならば、やはり今の状況下であるなら、アメリカの人々の怒りや悲しみを少しでも理解しようと努力し、喪に服すことかな、と。

高橋：だから、施設がたとえ承したとしても、私達は遠慮すべきかもしれませんね。施設側の責任者が許可したとしても、すべてのスタッフが快く向かって下さるとは限らない。その中には、今回のテロで犠牲になった方々の家族、友人などがいらっしやるかもしれませんし…。

館：今回、痛感したのは、客観視、と言いましょいか、マクロな視点で物事を見て、総合的に判断する能力が私達に要請されているように思いました。自分がどうしたいか、という観点より、もっと広い視点で、自分と他人と世界を見ていくトレーニングをしていかないと、日本人は世界には通用しないし、日本人の国民性を疑われる可能性が出てくるようにも思います。

高橋：そうですね。

館：今日、13日の朝は、視察に行く、行かないの議論をしていたのですが、結論が出ませんでした。何となく場の雰囲気が悪くなって…。今、私達が一番気をつけるべきことは、この28名の団体が、内部分裂を起こさないようにすることです。意見の異なる相手を排斥しあう雰囲気を作らないことだと思います。

高橋：確かに意見を言いあうことは大切なのですが、その中で対立してしまうと、何か緊急時にまとまって行動することが難しくなってしまう。通訳兼コンダクターの方もそのことを案じて心配りをしておられたと思います。

館：今、私達の最大の目標は、とにかく無事に全員で日本にたどり着くことです。その目標がある以上は、分裂は避けなければならない。

高橋：そう。結局その後、皆で犠牲者の冥福を祈って、黙禱とお祈りを始めたんです。そのお祈りをしている最中に、繰り返しになりますが爆弾騒ぎで緊急避難という事態があったという…。

対談

館：そうでしたね。その時のデーケン先生のお祈りの言葉が印象的でした。「遺族の方々は今から様々な悲嘆のプロセスをたどりますけれども、どうぞ神よ、彼等の傍にいて下さい。彼等の悲しみをお癒し下さい。彼等に援助の手を差し伸べて下さい」というその言葉に、私はとても感動しました。場の雰囲気もそれで落ち着きましたし、このお祈りのおかげで皆、パニックにならずに避難できましたね。

高橋：あれでもし、皆が各階の自室にいる時にあの騒ぎが起こったら、メンバーは散り散りになってしまい大変なことになっていましたね。皮肉なことに、その爆弾騒ぎのおかげで、視察どころではなくなってしまいましたけど。

館：あれが天からの答なのかもしれませんね。

【地球をひとつにする価値観の確立を】

館：先の見通しが立たない状況で、精神的に疲れている方がちらほらと出てきましたね。日本では経験したことのない状況に置かれていますので、精神的なストレスはものすごいものがあろうかと思えます。私もサイレンの音で、またどこかで何かが起こったんじゃないだろうか、と不安になりますし、熟睡ができません。何ともいえない恐怖感がとれないです。そんな中、先生は自らカウンセラーの役割を志願されたようですが。

高橋：とりあえずお話を伺うくらいしかできないですが。しかしこのような状況って、日頃の感覚と全く違いますよね。

館：確かに。感情レベルで行動される方もいらっしゃるでしょうけど、それを超えてもっと根源的なものが表面に出てくるように思います。私は最初の暴動の中にいた時、「どうして自分がこんな場面にいるの？」という現状を受け入れたくない気持ちとか、「まだ死にたくない」、「死んでもいいけど、痛いのは嫌だ」などという、原始的なレベルでの感情が全面に出ていました。しかしそれからしばらく時間が経って、客観的に自分を見つめることを始めてから、自分の内なる声に忠実に生きることの重要性を感じたのです。どのように生きれば、偽物の自分ではない本当の自分が満足する

ののだろうか、と。結局、生存のみを考えた生き方をしたら、後できつものすごく後悔するだろうな、と感じました。その時に、人は本当の自分と出会えた時に、理想とか理念で死ぬる存在なんだな、と思ったんです。人間ってすごい、と改めて思いました。

高橋：なるほど…。

館：生命の危険が迫っている時、自分の身を守ることだけに留まるのか、周囲の人々のことまで視野に入れられるのか、という究極の選択を迫られるんだな、と思いました。

高橋：感じましたね。そんな時、人は2通りに分かれるんでしょう。それは職種や肩書き、年齢に関係なく。

館：実は、薄暗い非常階段を降りている時、足の遅い人を前にして、早く降りて！と心の中で叫びました。ああ、またこんな気持ちが出てきたな、と思いました。今こそ、他者への気遣いが重要な時なんだ、と即座にマインドを切り替えたというか…。意識せずにこんな気持ちになりたいですが(笑)。

高橋：私も一瞬そのように思いました。しかしここは追い抜いてはいけないし、整然と降りようって。

館：最初の暴動の時、私は自分の弱さを嫌というほど見せつけられたんです。その見たくない自分との直面が、最初の第一歩だったように思います。赤裸々で未熟な自分を直視することは、一つの勇氣、なんだろうと思います。しかし28階からは、長かったですね。

高橋：あれは本当に長かった。でも、私達のメンバーは誰一人追い越したりしませんでした。これは、うれしかったですね。

館：この機会に痛感したのは、自分が持たなきゃいけないものってほとんどないな、ということですよ。

高橋：そう。資格だとか、肩書きだとか、お金だとか、そういうものはもう、度外視してもいいと思いました。私達は今回、タイミングが悪ければ、ここで死んでいてもおかしくはなかった。あの旅客機の進路がちょっと反れていれば、私達が直撃を受けたかもしれないし、私達はその飛行機に乗

っていたかもしれない。ワシントンからニューヨークに来たのは、同じような旅客機でしたから。

館：たまたま私達は無事だっただけなのですね。

高橋：だから、頂いた命だと思って、これから生きていかなきゃいけない。

館：完全に視点が変わりましたね。生まれ変わったような気がします。

高橋：変わりました。

館：グローバルな視点に変わりました。これは決して忘れてはいけません。

高橋：世界の中の自分、という視点ですね。これは、若い方々、特にこれから医師になる方にお伝えしたいですね。

館：本当に…。生き残った人間には、仕事があるんです。この事件を内側から見てきた者として、地球全体が調和するような、真の意味での自由とは何なのか、平和とは何なのかを考え、それを伝えなきゃいけないだろうと思います。

高橋：今の日本の平和は、薄氷の上にある、砂上の楼閣のような平和なのです。世界はこの事件を機に、非常に危うい方向へ行こうとしています。戦争は何も生まない。

館：また、テロには報復を、という際限のない憎しみの繰り返しではなく、民族や宗教も国家も超えた「地球をひとつにする価値観」の確立が必要じゃないかと思います。その価値観も、全体主義的なものではなく、自国と他国が協調しあいながら、世界全体の繁栄・発展をもたらすものへ。もちろんその前段階に、私達一人ひとりの幸福があるのは言うまでもありません。その意味でまさに今、ターニングポイントなんだと思います。人類はそのどちらを選ぶのか、という選択を迫られているように思います。

高橋：おっしゃる通りです。

館：私、ふと感じたことがあったんです。このテロ事件に巻き込まれた人々は、報復より、真の平和を望んでいるのではないかと。恨み心で恨みは解けないことを痛感しているのは、この事件に一番近い場所にいた方々ではないでしょうか。血で血を洗う殺戮行為をくり返したところで、憎しみがくり返されるだけで、終わりはない。行き場のない悲しみが増すだけだと思います。

高橋：そうですね、これ以上悲しむ人を増やしてはいけません。この価値観…。やはり、他の方に対する「愛」に他ならないのでしょうか。

館：愛…。それこそが、自分と他人を共に生かしあい、支えあいながら、すべての人や国が発展していける普遍の真理なのでしょう。恨み心の拡大を止めるのは、この価値観なのだろうと思います。

高橋：本当によく分かります。

館：私達は今回、ホスピス視察の途中に、奇しくもこの事件に巻き込まれたわけですが、この事件に対する思いそのものが、私達が学びにやってきたホスピス・マインドそのものではないかと私は思っています。それは、他者への思いやりであり、高橋先生のおっしゃる、愛そのものだと思います。そしてそれこそ、犠牲となった方々の魂が癒される、真理ではないかと私は思っています。これを伝えていくことが、私達のミッションだと思っているのです。

〈帰国前に〉

【私達は医師である前に、愛を持った人間である】

高橋：私達は、予定から4日遅れの9月18日に成田へ到着する飛行機を確保することができました。これまでも振り返って館先生、いかがですか。

館：ここにいる自分に何ができるのか、と事件の後、毎日考えていました。先生はどうか？

高橋：私は、もう少し語学力が堪能で自分ひとりで行動できるだけの情報収集力があつたら、ボランティアに行っていたでしょうね。アメリカに来て思ったのは、ボランティアの土壤というものが確かにある。

館：ある日テレビで、こんな場面が放映されていました。ビルが崩壊した現場の近くで、一人の青年がインタビューを受けていたのです。「どうしてここにやって来たのですか？」という問いに、「僕に何ができるか分からないけど、とにかく来てみました」と真剣な面持ちでこのように答えていました。

高橋：やっぱり、他の人達に対して何かをしてあげたい、という思い。その気持ち。

対談

館：その純粋な気持ちを、素直に表現される国です。ね、アメリカは。シスター・ビンセントと共通するものがありますね。

高橋：でも私も日本は捨てたものじゃないと思ったのは、このような危機的な状況の中でも、私達のメンバーはお互いに声をかけあい、支えあうというそんな気持ちを、持っていた、ということです。テロ事件を経験したことによって結末は強まりましたし、皆一つになって一緒に日本へ帰ることができるのも、皆さんのお蔭だと思います。ホスピスを学びに来た私達としては嬉しいことです。

館：そう、誰もが皆、支えあいの気持ちを持っているんです。

高橋：問題は、それをどのような形で素直に表現するか、それだけなのです。

館：それが、立場だとか地位みたいなもので邪魔されてしまって、なかなかできないんですね。素直に表現していった時に、人と人の垣根みたいなものが取り除かれるのでしょうか。

高橋：そう、例えば、「先生」と言われること。私達は医者ですから、そう呼ばれることに慣れ過ぎていきますけど、特に年上の方から「先生」と呼ばれるということはどういうことか、「白衣」を着ているということはどういうことなのかと考えてみなくては行けません。

館：ホスピスでは誰も白衣は着いていませんでしたね。

高橋：あれが普通なのです。だからこれから医師になる方、読者の中にはたくさんおられると思うんですけど、白衣を着なきゃ、医者じゃないなんて、決して思わないで欲しいし、先生と呼ばれなかったらむっとする、これは決してやらないで欲しい。私達は医者である前に、一人の人間です。愛を持った、人間である。その一点だけでいいと思うのです。

館：私達は、愛を持った人間である…。これを今回、再認識するために、ここに来たのかもしれませんが。私はシスター・ビンセントに出会った時に、このように思いました。人間は単なる物体ではない。人間は単なる物体ではない。誰もが皆、価値を求めて行動するという目的意識があると。この

価値は人によって様々でしょうけれども、私達は社会生活の中において、それを実現する必要があるように思います。そのような気持ちを素直に体现した時、これはシスターの言葉で言えば「内なる声」に忠実に、ということなのでしょうけど、それこそが、自分のみならず世界、また、地球を発展させ、調和させていくのではないかと…。人が生きている意味はこういうことだったんだ！と、逆説的ですが死を意識して痛感しました。とんでもないことに気付いたような、そんな感じでした。

高橋：おそらく日本人は、何かしたいと思っても、何をどうすればいいのか、そこがわからないのかもしれないかもしれません。阪神淡路大震災の年、あの年を日本ではボランティア元年という人もいますけれども、あの時は、皆さん「何かできることをしたい」と痛切に感じられたと思うのです。そこにはホスピス・マインドを感じます。

館：そうですね。そしてそれは些細なことでもいいのです。今の自分にできる最大の価値を生み出すこと、それはボランティアであっても、花を現場に手向けることであっても、献血することであっても、何でもいい。また、この事件に対して思いを馳せ、犠牲となった方々の冥福を祈ることであっても…。今という時間を生きている中で、自分ができることをやっていく。そんな姿勢が一番重要なことだったんだと、痛いほど感じました。帰国寸前に、私達は何とも言えない気持ちで、マンハッタンを歩き回りましたね。足が痛くなるほど歩きました。そこでいろんなものを見ましたね。

高橋：ええ、結局何もできませんでしたけど、何かできることはないかという思いだけで、まだ煙立ち上る現場近くのセント・ビンセント病院まで二人で行きました。「私達は日本から来た医師です。事件のため飛行機が遅れて滞在しています。もし、日本人の患者さんがおられて、何か必要なことがあればさせて欲しい」とお願いをしました。出てきて下さった女性は、私達の意を汲んで共感して下さいました。「あなた方を必要とするならまた連絡をします」と彼女は笑顔で答え、私達は連絡先を残して病院を後にしました。結局何も連絡はなかったのですが、彼女の対応に私は救われた



セントビンセント病院の前には、missing (尋ね人) の張り紙があった。



この夫妻はどんな気持ちで張り紙をしたのだろうか。この壁は個人の建物の壁だが肉親や友人を探す人々のために開放されている。



ワシントン・スクエアは多くの市民が集う広場の1つ。門の近くのフェンスは、祈りのキャンドルや花束、寄せ書き、星条旗などで埋め尽くされていた。

ような気がしました。その後、私達はさらに街を歩きました。そこでいろいろなものを見ました。街が泣いていましたね。

館：現場近くの広場に張り出された紙、「missing」と書かれた写真を見つめました。地面に置かれた無数のキャンドルや星条旗を見ました。今、まさに、写真を張り出そうとしているご夫婦の背中を見、先生は何かおっしゃっていましたよね。

高橋：写真を見ると、笑顔の青年が写っていました。身長、目の色、髪の毛の色、など本人特定のための悲しい記載がありました。おそらく、あの老夫婦の息子さんだったのでしょ。もうご家族は、彼が戻ってくることはないとわかっておられたのだと思います。でも、分かっているけれども、写真を貼りたいのです。その時、どんな気持ちであつたろうかと思うと胸が痛みます。

館：少しでも悲しみが癒されるよう、祈ることしかできません。

高橋：それと同時に、彼らが感じている最愛の家族を失う悲しみを、もうこれ以上多くの人が味わうことのないようにしなければと強く思います。最後になりましたが、先生、何かありますか？

館：やはり今回、このホスピスツアーで学んだ医療の原点、「ホスピス・マインド」=「愛」こそ、世界の共通言語であり共通の価値観であると思いました。これがすべての方の心に宿った時に、いえ、すでに宿っていることに気付いた時に、宗教や民族の違いを超え、分裂し争っている世界が統合していくのではないかと…。そのように個人の



ニューヨーク中心部にある広大なセントラルパーク。抜けるような青空と緑の芝生に、平和を祈らずにはいられなかった。

対談

価値観が変わった時に、それは自ずと世界をも変えていく、と信じています。

高橋：私もそう信じたいです。無事に日本に帰りましょうね。

館：本当に。生き残った人間には、すべきことがたくさんありますから。

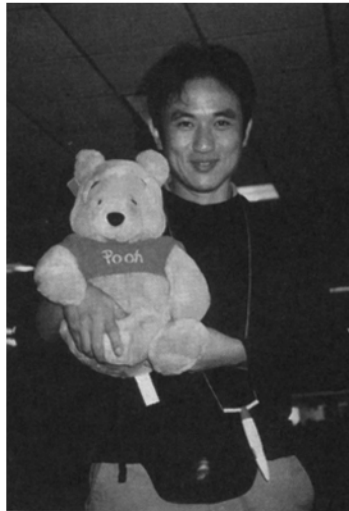
高橋：またいろんなことをお伝えしていきたいですね。

館：本当に…。

高橋：シスター・ビンセントに始まり、ビンセント病院で終わった視察の報告をこれで終わりたいと思います。館先生ありがとうございました。

館：最後に、今回、犠牲となった人々のご冥福と遺族の方々の悲しみが少しでも癒されますよう、共に祈って頂けたら、と思います。

(高橋 記)



ホスピスでは、クマがボランティアをすることも多いのです。